

# UIFA JAPON NEWSLETTER



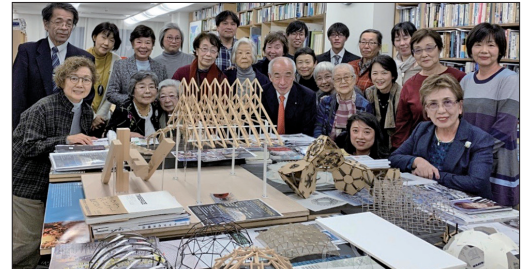
No. 114 Dec. 25, 2019

Union Internationale des Femmes Architectes Japon

国際女性建築家会議 日本支部

## ■主な内容

- ・「東京が楽しすぎる」ー複合災害への備えとはー
- ・新会員の紹介
- ・特集：木造建築の保存と継承の形をみる  
UIFA JAPON 見学記  
木造大邸宅の3事例  
京都西陣の町家・リノベーション
- ・被災地通信 (23)「台風 19 号被災地支援の今」
- ・会員の参加団体会報『誌』



A-Forum の構造模型を前に和田章先生と (写真：井出)  
With Dr.Akira Wada in front of the structural model of A-Forum

## 第 71 回 海外交流の会 「東京が楽しすぎるー複合災害への備えとはー」の講演会に参加して 吉田 洋子 UIFA 71th Intercultural Lecture: Is Tokyo Too Much Fun? Is It Prepared for Complex Disasters? YOSHIDA Yoko



講師：和田章氏  
Dr.Akira Wada  
(写真：岩井)

2019年11月30日(土)の14時～16時30分、お茶の水のA-Forumで和田章氏(東京工業大学 名誉教授)による講演会が開かれた。

UIFA 会長挨拶のあと、A-Forum を主宰している斎藤公男氏から建築関係の人が集まるこの場所の説明があった。参加人数は33人で熱のこもった議論をしていくのにはとても似合った場所であった。

和田章氏の講演はとてもわかりやすい、しかし私たちの心を揺さぶる内容であった。なぜ東京に多くの人が集まるのか。なぜこのような高い危機ポテンシャルを生み出す都市づくりを行っているのか。大都市への過度の集中を行っている東京は次の大震災がもし来たら、いったいどうなるのか。これはいったい誰の責任なのか。

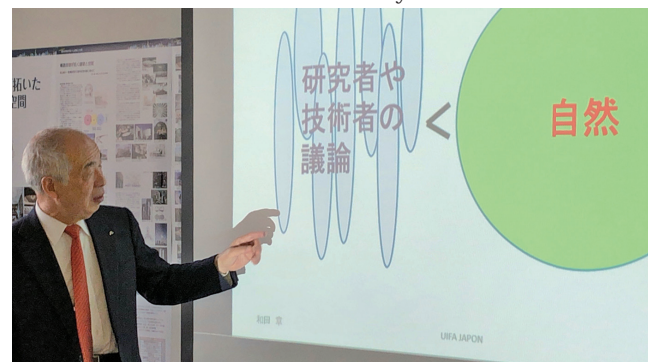
私たち建築に携わるものが実は考えなくてはいけないことではないのか？構造は構造、設計は設計、ということで専門分野に分かれて仕事をしているので、それぞれが実は無責任になっているのではないのか。アーキテクトは前へ進め、原発も同じ。ムチをたたいて前へ前へ進める人ばかり、手綱を引く人が本来は必要なはずである。自然はとても大きい。そのことを忘れて、繭の中に入ったそれぞれの専門家がそれぞれの繭の中で議論をしているのではないのか。しかもその間にはすきまがある。なにもしないことも実は問題なのである。日本の昔話は都に行き、えらくなる話、ヨーロッパでは森へ入り、幸せに暮らしましたで終わる。再度私たちは立ち止まって考えるべきではないのか。

私たちにとって耳の痛い、しかし真面目に考えなくてはいけないことだということを、ユーモアを交えてお話いただいたので、そのことが心に直に伝わってくる感動するお話であった。部外者はいないというお話が一番心に残った。

A lecture by Dr. Akira Wada (Professor Emeritus, Tokyo Institute of Technology) was held Tokyo on November 30, 2019.

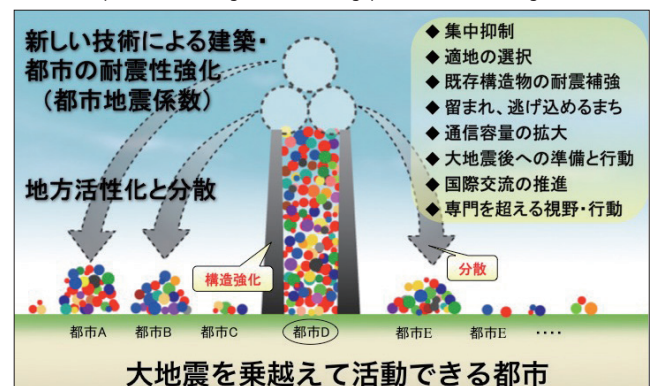
He asked why so many people move to Tokyo and why we are creating cities that generate such high crisis potential?

It was an easy-to-understand lecture that sounded an alarm for those involved in architecture jobs. We work in specialized areas such as architectural design, structural engineering, and many fields, but we are ignorant of other areas. Therefore, there are gaps between these fields that pose serious risks. It was a touching narrative we have not heard before, but it will make us think more deeply about how to build a beautiful and safe city.



和田先生説明(縦割り繭とその隙間<自然)(写真：牛山)

Dr. Wada explains discrete organizations and gaps between them - Big nature



大地震を乗り越えて活動できる都市(提供：和田 章氏)  
A city which can survive a major earthquake

私の日常  
My Daily Life and Work

内藤 恵子  
NAITO Keiko



高蔵寺ニュータウンに移り住んで早40年余り、人生フルーツで有名になった津端邸と同じ町で、人間スケールの地方都市にすっかりなじんで暮らしています。高蔵寺ニュータウンはオールドタウンだと言われる中、今でも建て替えだけでなく、大小の建売住宅地が開発され、あちこちで工事が行われています。

交通手段さえ整えば、住みやすい緑豊かな良い街だと思のですが…。最近、自動運転のモデル地区になって様々な事が試行されているようです。

私の仕事は、長年の専業主婦生活で地域と繋がり、人間関係だけで30年余りが過ぎたような気がします。市の高齢者住宅相談員では数多くの事例に出会い、仕事の中で高齢者や障がい者の住宅に関わる機会も多く、沢山の事を学んだような気がします。

今は建築士会の仲間達と一緒に、地域包括ケアシステムの5本の柱の一つでありながら置き去りにされている「住まいと住まい方」を何とか図の通り「植木鉢」にすべく活動をしたりしています。

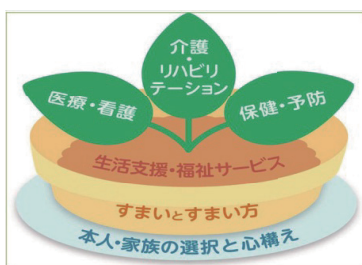
I've lived in Kozoji New Town near Nagoya for 40 years. In this town, there is Tsubata House, famous from the documentary "Life Is Fruity." This town was developed a long time ago, but even now, rebuilding and new housing are underway. I think it is a nice, green city that is easy to live in if you have transportation. Recently, there have been trials as a model area for self-driving cars.

I've been living as a housewife in a neighborhood with many residents. I am an elderly housing counselor in the city. During consultations, I feel I have learned many things by encountering cases of many elderly people and people with disabilities.

Now, together with the members of the Aichi Society of Architects and Building Engineers, we are working to realize "Housing and Living," which is one of the five key points of the comprehensive community care system, as shown in the figure.

内藤さんによる模式図の説明

これは、最近よく見られる地域包括ケアシステムの図です。「高齢者が住み慣れた地域で最後まで自分らしい生活が送れるよう、それぞれの地域の特性を生かしながら地域の中で連携して支えあうこと」。住まいと住まい方はその基本にあることを示しています。しかしながら、厚労省から生まれたことも



あり、「住」が植木鉢の役割を果たすことがなかなか認知されていません。

出典：平成25年3月 地域包括ケア研究会報告「地域包括ケアシステムの構築における今後の検討のための論点」

私らしさの原点  
The Origin of Personality

小林 淑子  
KOBAYASHI Toshiko



先月、初めて設計監理に関わった建物を約30年ぶりに見てきた。表札も当時のオーナーさんのままで、竣工時と変わらない佇まいだった。RC打放しのその建物は、オーナー住宅+賃貸住宅+店舗で、懐かしく写真を撮っているとあの頃の思いが浮かび上がってきた…安藤忠雄氏の住吉の長屋、ミース・ファン

ン・デル・ローエ氏のファンズワース邸、出江寛氏の東京竹葉亭に衝撃を受け、「神は細部に宿る」と線を引き、建物を見て回っていたあの頃。

学校を卒業後、RC打放しの共同住宅や事務所ビル設計監理、高齢者・障がい者の住宅リフォーム、S造商業建築の設計監理、小学校体育館・大学施設・裁判所・刑務所内施設の設計、航空自衛隊基地内施設の改修設計に携わってきた。事務所をかわるたび、設計する建物の用途も構造もかわった。2014年に宮城県村田町が重要伝統的建造物群保存地区に選定され、「村田修景仕様書」作成の為に伝統様式調査に関わった事で、木造在来工法で「伝統様式に従う」事が条件の村田修景基準建物の設計案を考えている。

用途や構造に関わらず「設計する」時に立ち返っていたのはいつも、『あの頃』の住吉の長屋やファンズワース邸、東京竹葉亭だった。そこにあるものが、私らしさの原点だ。

Last month, I saw a building I took part in designing and supervising about 30 years ago. The building has not changed, with the name of the owner's house, rental housing and shops. The concrete on the building exterior reminds me of that time when I was young... When I started working, I was amazed when I saw the Row House in Sumiyoshi (Tadao Ando), Farnsworth House (Ludwig Mies van der Rohe) and Tokyo Chikuyotei (Kan Izue). I felt "God is in the details." After graduating from university, I did design supervision work for concrete apartment houses, office buildings, renovated housing for the elderly and the disabled, steel structure commercial buildings, and so on. In 2014, Murata town in Miyagi Prefecture



designated an important traditional buildings preservation district. I was involved in a traditional style survey for creation of Murata scenic specifications. Now when I am thinking of the design of Murata, I always turn back to the Row House in Sumiyoshi and the other buildings. It's the origin of its personality.

当時と変わらない佇まいのRC打放しの建物

地域密着を心掛けて  
Keep in touch with the community

池田 園子  
IKEDA Sonoko



男女雇用機会均等法が施行された1986年4月に大学に入学しました。大学は女子大学でしたが、希望した企業が中小企業であったためか？私個人の感覚の問題なのか？バブル景気のおかげか？建築の世界であっても特に男女の差を意識しないまま、就職先は生まれ育った地元

名古屋を選択し、就職することができました。

大学時代は広い視野を見せてもらったと感じていますが、結婚・子育てをしていく中で、地元愛が強くなっているのを感じています。現在は私の実家を二世帯住宅に建て替えて住んでいます。名古屋の中でも私が住む瑞穂区は比較的中心にあるにもかかわらず、地元に戻る人が多く、母校に子どもを通わせる人が多い地域です。父兄の半数近くは子どもの入学式で校歌が歌えるという学校です。小学校でPTAの役員を務めた際は、子どもたちがいかに地元の方々に見守られているかを感じる機会になりました。グローバルという世間の波に逆行しているようにも感じますが、人の基本はとても身近な事の積み重ねであるとも感じ、大きなことはできなくてもいい、地元密着で頑張っていこうと考えるきっかけにもなりました。

頑張りすぎず、自分にできることをちょっとだけ頑張っ て地元に戻元する。これが私の心がけていることです。

I entered a women's university in 1986 when the Equal Employment Opportunity Law was enforced. Even in the building industry, I was able to work in my hometown Nagoya, without being particularly aware of gender differences.

When I was in college, I had a broad perspective. My love for my hometown grew deeper as I got married and raised my children. I currently rebuilt my home into a two-family home. Mizuho Ward, where I live in Nagoya, is a relatively central area, but many people return to their hometown and many children go to school where parents graduated. When I served as a Parent-Teacher Association board member in elementary school, I felt how the children were watched over by local people. I came to want to work hard with the local community.



I will do my best to do what I can, and give back to my hometown.

リフォームしたご近所さんのお住まい、桜並木を見るサロン

幻の「金唐革紙」について  
Kinkara Leather Paper

上條 千恵子  
KAMIJO Chieko



昨年11月に入会をしました。現在建築とは遠いところにおりますので、学生時代に戻って建築の思い出をお話しさせていただきます。

約30年位前大学2年の夏に北海道旅行した時に歴史的建造物の旧日本郵船小樽支店に行きました。そこで内装に使われた「金唐革紙」に出会い村松貞次郎先生のご指導

により卒論研究としました。

旧日本郵船小樽支店の設計者は佐立七次郎で工部大学校(東京大学工学部前身)の一期生。東京駅などを設計した辰野金吾と同期で現存する建物が少ないのですが、この建物は内装含めて近代建築として秀逸です。2022年3月まで保存修理工事中。「金唐革紙」は明治初期には殖産興業品として欧州に輸出するようになり、日本では鹿鳴館や旧岩崎家にも使われていたそうです。(現在では研究者により本格的に復元・研究されているそうです。)

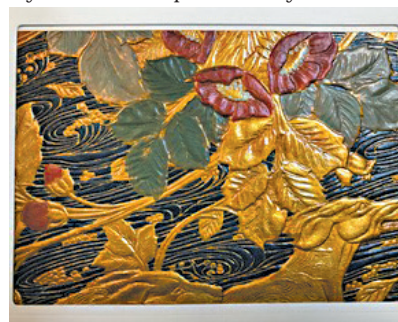
先日/UIFA JAPONで塩川先生のデンマークの装飾磁器の講義を聞きましたが、欧州ではジャポニズムの時期に日本では西洋化の波が起きていたと思うと感慨深いです。と同時に「金唐革紙」のような日本の伝統工芸品についても今後UIFA交流の中で何か新しい展開があるといいなと期待します。

About 30 years ago, when I traveled to Hokkaido in the summer, I went to the former NYK Otaru branch of a historic building. There, I found kinkara leather paper used in the interior, and made a thesis study under the guidance of Dr. Teijiro Muramatsu.

The designer of the building was Shichijiro Satachi, who was a first-year student at the Imperial College of Engineering. He was in the same class as Kingo Tatsuno, who designed Tokyo Station. The NYK Otaru building is an excellent example of modern architecture, including the interior, and is currently under preservation and repair work.

In the early Meiji period, kinkara leather paper was exported to Europe as an industrial product, and in Japan it was used in the Rokumeikan and the Iwasaki Residence, which is currently restoring and researching it.

The other day at UIFAJapan, I heard a lecture on Japanese-style decorative porcelain by Prof. Shiokawa. At the same time,



I hope that there will be some new developments in the UIFAJapan exchanges for such Japanese traditional crafts as kinkara leather paper.

復元された金唐革紙  
(製作：上田尚氏)

今年6月名古屋総会後見学した龍興寺、そして11月京都この指とまれⅡで訪れた蘆花浅水荘と清風荘、これらは大正から昭和初めに建てられた木造の大邸宅で、長い年月を経て様々な形で保存されている。

We visited Ryuko Temple in Nagoya in June, and visited Rokasensuiso and Seifuso, beautiful mansions built in the Taisho period to the beginning of the Showa period in Kyoto, in November.

#### <東京から移築され>龍興寺（名古屋市）

昭和7年（1932）東京白金に建てられた、藤山邸の木造和館部分である。当初はRC造洋館部分もあり、設計は武田五一だが、会員の宮崎玲子氏の父・宮崎謙三が実施設計を担当。この見学にも玲子氏が同行し資料が提供された。

実業家・藤山<sup>らいた</sup>雷太（1863-1938）は佐賀生まれ、大日本製糖の再建成功後に邸宅の計画を武田に依頼。武田は関西在住のため卒業生の宮崎を推薦した。和館部分の工事には武田の指導を受けた大工棟梁・魚津弘吉が加わる。建物は武田の代表作の一つとなるが、戦後米軍に接收され、イタリア大使館として使われた。昭和51年（1976）、和館部分を魚津の紹介で龍興寺に移築。愛知県有形文化財に指定された。

龍興寺は戦災で全てを焼失していた為、この和館部分を移築、本堂として活用。この他、敷地内には古民家や木造建物が数棟あり、いずれも庫裡や茶室などに利用され、お茶の稽古等で人の出入りがあり境内全体に活気もたらされていた。

#### Relocated from Tokyo: Ryuko Temple (Nagoya City)

This was a wooden Japanese-style building in the Fujiyama residence, built in 1932 in Tokyo. It was designed by Goichi Takeda. UIFA Japon member Reiko Miyazaki's father, Kenzo Miyazaki, was responsible for the implementation design.

Businessman Raita Fujiyama (1863-1938) was born in Saga. After the successful reconstruction of Dainippon Sugar, he commissioned Takeda to plan his residence. Takeda was working in Kansai at the time. Kenzo Miyazaki moved to Tokyo and with Hirokichi Uozu, was put in charge of the Japanese-style house. In 1976, it was relocated to Ryuko Temple by Uozu. It was designated as a Tangible Cultural Property in Aichi Prefecture. Ryuko Temple was destroyed during the World War II, so the residence is used as the main hall now.



#### <重要文化財に指定され>蘆花浅水荘（滋賀県大津市）

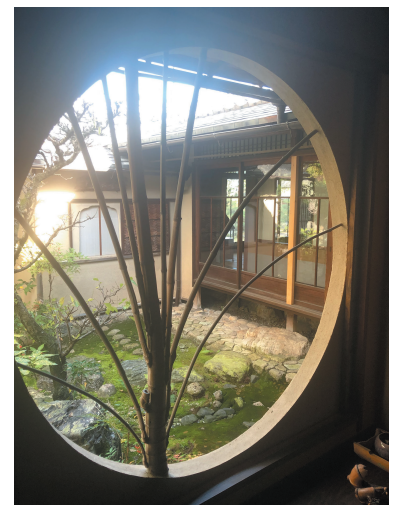
大正10年（1921）日本画家・山元春挙（1871-1933）の別邸として建てられた。春挙は京都画壇で活躍。建物は春挙と棟梁が細部まで話し合いながらつくられている。例えば春挙は竹を好み竹の間と称し、床柱等から収納棚の引手に至るまで竹を使用。襖絵には彼の筆で竹が描かれている。また、我々が最初に通された客間は、柱や長押などに美しい面皮丸太を用いた数寄屋造りで、目の前には琵琶湖を臨める美しい庭が広がる。

昭和30年（1955）春挙の親族が円融山記恩寺を開山し宗教法人となった。税対策と思われる。平成6年（1994）、中村昌生氏が近代和風の建物として高く評価し、庭園も含め重要文化財に指定された。その後、7年をかけ耐震工事などを行い、現在、予約で見学ができる。今回親族の山元氏とボランティアの案内で見学。北側に10階建てマンションがそびえ立ち、周辺は開発の波を受けているが、蘆花浅水荘は爽やかな姿を見せていた。

#### Recognized as an Important Cultural Property: Rokaseisuiso (Otsu City)

This was built in 1921 as a resort villa for Japanese painter Shunkyo Yamamoto (1871-1933). He was active in Kyoto art circles. The building was made after he discussed the details with the builder. For example, he loved bamboo, and used bamboo from pillars to bookshelves. He also drew bamboo on the fusuma door panels with his brush painting. The main guestroom was Sukiya-style, with rounded pillars, and a view of a beautiful garden.

In 1994, Prof. Masao Nakamura's modern Japanese-style house was designated as an Important Cultural Property, including a garden. After that, it took 7 years to finish earthquake-resistant construction, and it became possible to tour by appointment.



左：  
龍興寺本堂 金閣寺を模したといわれる楼閣が象徴的である。

Ryokoji main hall is a symbolic building that is said to resemble Kinkakuji.

右：  
竹の間の丸窓より、梅の間と、庭の松の木を臨む。

From the round window of the bamboo-room, facing the ume-room and pine trees in the garden.

### <大学に寄贈され>清風荘（京都市左京区）

大正2年（1913）徳大寺家の別邸のあった場所に西園寺公望（1849－1940）の京都控邸として建てられた。西園寺は当家の次男、ここで幼年期を過ごした。実弟の六男・住友友純（1865－1926）は普請道楽で、住友家お抱え大工・二代目八木甚部衛、数寄屋大工・上坂淺次郎に建築を依頼、約4年をかけつくられた。建物は主に私用として使われ華美ではないが、天然の銘木をふんだんに使った素晴らしい近代数寄屋である。最初に通された座敷は面皮丸太が随所に使われ、畳は全室上質な畳で見られる手法・中継ぎ表で、縁が建主の好みか藍色無地である。庭は七代目小川治兵衛（植治）が5年の歳月をかけつくりあげた。座敷からは庭園が広がり中央手前に松を植え遠近感を出し、さながら屏風絵のようだ。

公望没後、清風荘と庭園は創設に関わった京都帝国大学（現京都大学）に寄贈された。昭和26年（1951）庭園が国・名勝に指定、平成18年（2006）建造物が登録文化財に、さらに平成24年（2012）建造物が重要文化財に指定され耐震工事等が行われた。現在、主に京都大学の教職員・学生の施設として利用されている。残念ながら非公開のため写真掲載を控えた。

### 歴史的遺産をみること

今回見学できた3つの大邸宅は、大正から昭和初めの木造建築の最も輝かしい時代に建てられ見応えがあった。建築家、棟梁や植木職、材料、そして財力ある人々が、時間を掛け丁寧につくっている。だがこれらを残していく困難さも感じた。宗教法人や学校法人などに託され税金の軽減を図り、文化財指定を受け維持修理を行っている。しかし管理費は各々で出さなければならない。こんなにまで歴史的遺産を残す意味は？我々が本物を見ることで日本の伝統を知り、明日への方向を探ることができるからではないだろうか。

### Donated to University: Seifuso (Kyoto City)

This was built in 1913 as the Kyoto mansion of Kinmochi Saionji (1849-1940). He spent his childhood there. His younger brother, Tomoito Sumitomo (1865-1926), asked the Sumitomo family carpenter. Although the building is not gorgeous because it was mainly used for private use, it is a wonderful modern Sukiya style with plenty of natural wood. The garden was created by Jihei Ogawa over 5 years. It spreads out from the first tatami room, and a pine tree is planted in the middle, giving a sense of perspective.

After Saionji's death, it was donated to Kyoto University, which was involved in the creation. In 2012, it was designated as an Important Cultural Property. It is mainly used as a student facility.

### Looking at Historical Heritage

These three mansions were built in the most glorious period of wooden architecture, from the Taisho period to the early Showa period. Architects, masters, planters, materials and people with wealth made them with time and care. However, it's difficult to leave them standing. They are entrusted to religious corporations or school corporations to reduce taxes, and are designated as cultural assets for maintenance and repairs. Even so, management costs must be paid individually. Why do we keep such a historical heritage? I think that by seeing the real things for us, we can know Japanese tradition and explore directions for tomorrow.

### 京都西陣の町家・リノベーション Renovation of Machiya as a Base for Japanese Culture : Kyoto Nishijin

正宗 量子  
MASAMUNE Kazuko

この指とまれを企画した上田会員の好意で、奈良から京都現場迄車を走らせた頃は、朽ち果てた床や壁の他、機織り機2台設置してあった基礎跡がこの町家の残像を象徴していた。

魅力ある都市世界一に挙げられる古都京都は、オリンピック控え外国語が飛び交う街と化している。30年来の友人の施主は、20年程フランスに在住、日本に食材輸入会社を立ち上げた才女。今年二つ目の勲章(オフィシエ)を貰い、こよなく日本の和文化を追求しこの町家を拠点に、今度は日本文化や芸術をフランスに発信したいとの遠大なミッションを公言するセンス溢れる方だ。

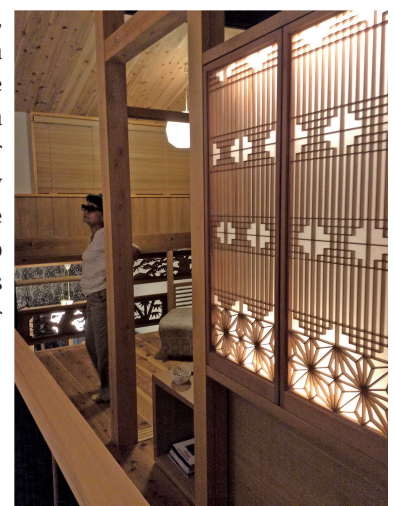
折しも私は二男の住宅を設計中で、工務店から美しい松竹梅木彫欄間二本を提供された。息子が望まなかった欄間は、その良さと価値を町家に活かしたいと言う、施主のたつての要望で、京都に搬送された。

デザインテーマが日本美に決まると、建物の強度、大和天井、135角の通し柱や梁を活かしながらの平面構成が施主の希望を入れつつ纏め上がった。ゲストハウスとして利用するが、時には食材に関するイベント上、キッチンにアイデアを結集。アイランドキッチンの背後は、古いよし障子建具5枚を収納扉に利用、冷蔵庫、食器類、洗濯機、掃除機迄の設備機器等を収納、使う時だけ扉を開ける工夫だ。間口5.4m、奥行15mの狭小空間には、鏡の効用を狙い広さを演出。外観の格子窓と障子や虫籠窓、玄関屋根には一文字瓦、それを支えるテコの原理などの意匠要素を保たねば町家とは言えないのだ。

一年に5800軒相当の町家が消滅してしまう現状に、京都市では、今年10月から町家住民に補助金を出す条例を施行した。美しい町家の保存と再生に賛同した施主の国際的感覚に心から乾杯したい。

The owner of this renovated *machiya* townhouse is a person who connects Japan and France through food. When "Japanese beauty" was selected as the design theme, we decided to reuse two carved *ranma* panels, *yoshi*-style *shoji* and *shoin*-style *shoji* to achieve a new Japanese beauty. The *machiya* is narrow, with a frontage of 5.4m and a depth of 15m. We kept the exterior as is, with the *shoji*, *mushiko-mado* insect-like window, and *ichimonji-gawara* tiles on the entrance roof, supported by a cantilever. In October 2019, Kyoto City enacted an ordinance to give subsidies to townhouse residents who restore their *machiya* townhouses.

書院障子を照明器具に再利用し、陰翳の美しさを演出  
Shoin shoji reused as lighting equipment



UIFA JAPON 事務局  
〒102-0083  
東京都千代田区麹町 2-5-4  
第2 押田ビル ㈱生活構造研究所内  
Phone: 03-5275-7861 Fax: 03-5275-7866  
E-mail: uifa@liql.co.jp  
URL: http://uifa-japon.com  
発行 2019年12月25日

THE SECRETARIAT OF UIFA JAPON  
c/o LABORATORY FOR INNOVATORS  
OF QUANTITY OF LIFE  
DAINI-OSHIDA BLDG.  
2-5-4, KOUJIMACHI, CHIYODA-KU  
TOKYO, JAPAN 〒102-0083  
PHONE :+81-3-5275-7861  
FAX :+81-3-5275-7866  
URL :http://uifa-japon.com

被災地通信 (23)

台風 19 号被災地支援の今 岩井 紘子  
Update on the Disaster Relief Program after Typhoon Hagibis IWAI Hiroko

旅先で知った我が故郷宮城県の台風 19 号による水害。県北の大郷町、県南丸森町の一級河川への支流決壊や堤防越えによる大洪水被害である。丸森町は裏山の山崩れによる未曾有の土砂災害に及んでしまった。4 年前の台風 10 号による岩泉小本川氾濫災害を彷彿とさせた。10 月 16 日知人を頼りに丸森に入るや、物々しい全国からの自衛隊、警察、消防隊の緊急災害支援車や TV 取材車、報道陣で、泥沼状態の役場周辺はごった返しの様を呈していた。町中心部にある町のシンボル「斎理屋敷」は勿論閉館中。知人宅で水の出ないトイレを借り、状況の聞き取り。持参したおにぎり 60 個と惣菜をお裾分けし、近くの小学校体育館避難所視察を兼ね、50～60 人ほどの痛々しい避難者を見舞った。

東日本大震災に続き、またかの思いが込み上げたが、地元だ、被災地支援出来ることはしようとの思いで支援物資調達の取次ぎを始めた。UIFA の皆さんからはもとより、全国から我が事務所に物資が届き、第一陣として 11 月 4 日、丸森町に段ボール 23 箱を取り次いだ。全壊 230 世帯もある丸森町は 8 部落あり、物資集積場の体育館からピストン輸送で被災者に届けているそう。冬場に向かい、まだまだ物は要り用とのこと、

当分支援物資取次ぎボランティアを頑張らねばとしている今である。



支援物資調達取次ぎをお手伝いいただいた皆さんと

■ 会員の参加団体会報 『誌』

災害多発の中で共に考えたい 渡邊 喜代美  
—命を守る街をつくる—  
Thinking collectively about Disasters : Creating Safer cities. WATANABE Kiyomi

紹介する「誌」は A4 版 200P 程度。広域ゼロメートル市街を考える“NPO ア！安全・快適街づくり”の年誌だが、書き手はすぐく多様で面白い。地域人、中学生から大学院生、研究者、行政人や企業人からも寄稿。方向性は“浸水リスクと賢く共生する親水都市”。河川の氾濫、高潮などによる被害も想定される東京のゼロメートル市街地には、おおむね都民 250 万人が住む。もし氾濫したら！！カスリーン台風の経験は強い教訓である。東京都や国は「スーパー堤防」あるいは「高規格堤防」を示す。だが地元で立つと縦横にはしる河川を目前に限界も認識。ではどうする。NPO や地域は浸水も親水も歴史も学び、そして“恐れているばかりではだめだ”“人の関係性も大事だ”と気づいた。そこで“防災だけ”のまちづくりではなく「防災“も”まちづくり」を理念とし、今、賢く共生する「耐水対応型市街地」の議論も始めた。地域社会のことから、まちづくりまで広く議論する「輪中会議」は情報交流、経験共有の場。こちらも参加者多様。25 号にはこの「輪中会議」も全記録掲載。近年の災害の実態を知るにつけ「誌」を紹介し、ぜひ！共に考えるきっかけにしたい。全号 NPO ア！のホームページへ。  
<http://banktown.org/>



■ 役員会報告

■ 2019 年度第 3 回 9 月 7 日 今年度総会収支報告 岩泉だれフォトニュース配布へ 源流研究会第 1 回会合報告 第 71 回海外交流の会講師決定 この指とまれ京都Ⅱ準備 コミュニティ支援合同打合せ 助成金申請 パンプ更新版審議 九州豪雨災害支援審議 NL114 号編集会議

■ 2019 年度第 4 回 11 月 22 日 助成金不採択 パンプ更新英語版審議 源流研究会第 3 回会合報告 第 71 回海外交流の会準備 この指とまれ京都Ⅱ報告 募金について 災害支援について審議 ソランジュ会長訪問計画 台湾女性建築家協会との交流審議 NL114 号入稿中

■ 編集後記

台風 19 号で満水直前の荒川（熊谷）のデータを一晚にらみながら水害対策を思考し、自助、共助、公助共に限界を実感（宮本）／岩淵水門の荒川—隅田川水位差 5.75m が満月間近の午前の強い引潮で救われたニュースは「荒川放水路」世代にとって感涙（井出）／温暖化で数十年に 1 回の災害は毎年来る？（薄井）／京都ツアー楽しかったです。朝皆さんと入った喫茶店も地元の古い店っぽく感じ。厚焼きトーストモーニング美味しかった！（飯田）／和田先生講演の「日本の東京集中の異常さと、森の自然に帰る幸せ」に心から共感（牛山）／年越え準備の師走、穏やかな新年を願う（御船）／首都直下地震「パラレル東京」には冊子に寄稿した人も多くインタビューに登場した。「備え」は自助共助公助の関係性スパイラル UP は日常時からと再実感（渡邊喜代美）